
闇夜の対妖伝【陰】

神の末席

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の対妖伝【陰】

【著者名】

神の末席

NZM

【あらすじ】

靈能力者の名家、法印一族の嫡子である少年・貉が送る、爽快妖怪バトルファンタジー。

序章（前書き）

キャラ紹介・其ノ壹

貉（16歳）

主人公。法印一族本家の嫡子で、生まれつき高い靈力を持つが、性格が大雑把なせいで靈力のコントロールが難。

序章

「……なんでこんな事になっちゃったんだろうなあ」

麓靈山の中腹で、法印 豪は、ホウイン・ムジナ今の現状に盛大なため息と共に言葉を吐き出した。

「…それは貉がどうしようもなく間抜けで軽率だからです」

傍らにいる女、水華スイカからは、冷たい口調が突き刺さる。それに対し、貉は目を据わらせた。

「けどよ水華。今回のこれは俺のせいか?」

よく見れば一人は泥だらけで土に身体を沈めていた。水華に至っては、首から下が地面に埋まっている。

「……では、誰の責任であると?」

「あーもうーはいはい、俺ですよ!俺のせいですよ畜生つ!」

低い位置から睨まれ、丑の刻過ぎの夜闇の中、貉はもうヤケクソになつて喚いた。

：数分前、

巨大な鳞蛇がぐわっとアギトを開いて突進してくる。妖怪と死闘の真つ最中だつだ。

鳞蛇の突進を一人は跳躍してかわす。

「六花・封縛！」

跳躍した水華が空中から縛魔術を放つ。
靈力が生み出した蔓が、鳞蛇を地面に縛い付けた。

水華が動きを封じたところを、貉が腰から刀を抜き放ち、鳞蛇に向かつて一直線に落下する。

「我が御手に地脈の力…」

真言を紡ぎ、刀に術式を乗せると、鳞蛇の額に怒号と共に振り下ろした。

「だあああああああつ！」

刀から黄色い波動からあふれ、振りかざされた刀身は鳞蛇の頭を両断した。

⋮ 土ノ式・断絶斬

陰陽五行の土の力を刀に上乗せした刀術だ。
水の性を持つ鳞蛇にとって、土の術は相剋。つまり弱点だ。
術で額から顎まで両断された鳞蛇は、ピクピクと痙攣したまま動かなくなつた。

しかし……

卷二

一地面か！

ズズズ……と地面が揺れ始めたかと思うと、突如、ボコッと沈んだ。貉の術が強すぎたのと、地下に蛇の巣穴となっていた空洞があつた事が災いして、ちょっとした地盤沈下が起きた。

ちょうど二人の真下で。

一人は投げ出されるように土砂の波に呑み込まれた。

で、現在に至る。

土に埋まつたままの状態で、水華は辟易した様子。

「…あなたは何でいつもこうなのですか。だいたい、相手は蛇なんですから、地下に空洞がある事ぐらい考慮できるハズですよ」

「…あんまり生意氣ぬかすと、引き上げてやらんぞ」

確かに水華は首から下が地面に埋まっている。自力で脱出するのは
難しいだろう。

「……破つ！」

「うおっー！」

水華は身体から靈力を爆発させ、周りの土を吹き飛ばした。余波を受けた貉が吹き飛ばされて転がる。

「水華、てめえ何しやがるー！」

「……」

地面に屈伏している貉が怒鳴り付けるが、水華は全くもって応える様子もなく、涼しい顔で受け流して、土から出た。

「…もう戻りまじょ。あまり遅くなると明日が辛いです」

「…聞けよ」

貉の弦きを無視して、水華はそそくさと立ち去った。

第一章 異変（前書き）

人物紹介 其ノ式

水華^{スイカ}（15）

法印家の靈能者。貉とは従妹に当たる。
縛魔術や探知術に長けるが、退魔法が苦手。
冷静沈着で現実主義。

第一章 異変

現代。

妖怪と聞けば、大抵の人は『昔の』存在と思つだらう。
確かに、戦国時代や平安時代は特に、無数の妖怪が跳梁跋扈してい
た。

その当時が、最も妖怪の活動が全盛期だったのは事実である。

だが、実は現代にも妖怪は存在する。

そもそも妖怪とは、悪意や怨念が具体化したモノがほとんど。
全てがそういう訳ではないが……

だからこそ、政治や経済なんかでドロドロになつてゐる現代もワリ
と妖怪は多い。

よつて、昔ほど表立たないが、妖怪を祓つ靈能者は、意外に必要と
されている。

我らが法印家も、実はある政治家のお抱えになつてゐる。
全く不愉快な話であるが。

……翌朝

「ふあ～……眠いい」

貉は目をショボショボさせて、フラフラと学校への道のりを歩いて
いた。

少し後ろに同行してゐる水華も、無表情ながら眠そ…

「 ニニニ…」

……いや、歩きながら寝ていた。どんな特殊能力だ。
羨ましい。

なんかもう怨めがましい目で水華を睨んでると、級友が背中を叩いて現れた。

「おはよっ、法印！」

「……ああ、山門か。おはよっ」

ヤマト・リョウ
山門亮。

貉のクラスメイトであり、貉や水華と同様、靈能者である。

「おいおい、氣の抜けた返事だな。今日は卒業式だつてのに」

「昨夜に死闘を繰り広げ、その上一時間しか寝ていないんだ。これで元気なヤツがいたら人間か疑うね」

「そうか？宗次さんは三日三晩、妖怪の群れとやり合つた次の日にも、いつも通りケロリとしていたぜ？」

宗次とは、法印

ホワイン・ソウジ
宗次。

現在の法印家当主で、貉の師でもあり、祖父に当たる。

「…あのジジイと一緒にするな。あれは人間では無く、怪物の部類

だ

「ハハハッ！あの生きながらにして伝説と言われた陰陽師を、ジジイ呼ばわりか！」

ムスッと不機嫌そうな顔をする貉に、軽薄に笑いかける亮。確かに、人間性はともかく、靈能者としての実力は、貉も認める。もう齡百近い年齢にも関わらず、日夜、世界中を飛び回って妖怪を修祓しているのだから。

しかし、だから腹が立つ

あんなのが最強の靈能者だなんて、貉は認めたくない。

「あーあ、それにしても何なんだ。とうとう俺たちも卒業か

しみじみ頷く級友に、貉は眉をしかめた。

「なんだよ、急に」

「……いや、あと数時間で級友が旧友になるんだと思つてなあ

そんな事を言い合いながら登校して行つた。

…

卒業式は無事に終了した

同級生たちが泣き別れしたり、励まし合つたりする中。

「わからないね」

一步外れた位置にいる貉が呟いた。

「ただの卒業式で、なぜそこまで感情的になれるのかね。別に一度と会えなくなるわけじゃないのにさ」

「会いたくなれば、会いに行けばいい。

そう思った矢先、不意に背後から男の声がした。

「そんな事を言つものではない」

「…？」

勢いよく振り返ると、三十代後半の、黒スーツを着た莊厳な男がいた。

「てめえ……なんぞここにいるーーこれは中学校だぞー。」

「卒業式に父親が来ていて何が悪い…？」

「てめえが保護者つてツラかよーヤクザやマフィアの方がしつくりくるー。」

確かに、この男を見ればそういう印象を受ける。

この男の名は、法印

ホウイン・カズラ

貉の父親であり、法印家をお抱えにしている政治家のボディガード

をやつてこる。

「……まあいい。とうとうお前も、中学を卒業した訳だ。靈能者として一人前に認められる」

「ふん…」

一見、祝いの言葉に聞こえるが、この男が言いたい事は『次期当主候補になる権利ができた』という事だ。法印家は、義務教育を終えると、その権利が与えられる。

貉には興味ない話。

しかし、法印家の宗家である貉は、今年から、当主決定の会議に参加しなければならない。

この父親は、我が子が自分の味方をすると考えてるのだろう。

大して影響力があるとは思えないが…

「それじゃ、仕事があるので失礼する」

それだけ言い残すと、葛は音も無く姿を消した。

その代わりに、一枚の人型の紙がヒラヒラと宙を舞っていた。

「あの野郎……仕事場から式神を飛ばしたのか！」

……

「……何？」

卒業式の帰り、一人で路地を歩く水華は、何か異変を感じた。

妖気だ。

それも極めて強力な……

ここから距離がある場所だが、確かに感じ取った。
しかも、隠す様子はなく、むしろ見つけてもらう事を意図して、わざと垂れ流している。

「性質は火……か」

恐らく罠だ。

だが、放つておく訳にもいかない。

それに、この妖気なら、他の靈能者も気づくだろ？

「……」

手元にある和紙で式神を作り、法印家の邸に飛ばすと、妖気の発信源に向かつた。

第二章 焰の災厄（前書き）

人物紹介 其ノ参

法印 葛 （39歳）

『ホウイン・カズラ』

貉の父。厳格で油断がない性格で、実戦経験が豊富。法印家の次期当主の座を狙っている。

第一章 焰の災厄

術で筋力を強化して、建物の屋根の上を跳躍しながら、妖気の流れてくる方へ向かう水華。

近づくにつれ、妖気が鋭さを増して、ピリピリと肌で感じ取れる。

だが、おかしい。

自分の速度以上に、妖気が近付いている。

(…「…あつちが近付いてるのか？」)

なら、狙いは自分の可能性が高い。

普通なら、抵抗力の少ない従人（普通の人）を狙うハズだが、強い妖怪は、強い力を求め、高い靈力を持つ人間を喰らうモノもいる。

「……ならば…」

と、水華は進路を変えた。

案の定、妖怪もこちらへ来る。

町を外れ、山の禁にある神社に着地した。

妖怪がたどり着くまで、あと一分ほどか……

「単身での戦いは、あまり得意ではないのですが……贅沢言つてはいけませんね」

……

「……なんだ？」

役所勤務の中、同じ異変を葛も感じ取っていた。

妖氣……しかし、何かおかしなモノが、微かに混じっている。この微量の気配に気が付いたのは、優秀な熟練者である葛だからだろう。

恐らく、貉や水華……他の靈能者で気が付いた者は少ない。

「どうした……葛」

今のは部屋の奥に座っている初老の男だ。

莊厳な顔立ちにヒゲを蓄え、葛以上に厳格な目付きは自信に満ちている。着ているスーツも高級ブランドのモノだ。

梶木 慧斗。法印家を抱える国会議員である。

カジキ・ケイ

「町の外れ……西の山の方角から強い妖氣を感じます」

「そんなもの他のヤツに任せとおけ。貴様はワシを護つておればよい」

危険が迫っているにも関わらず、慧斗は即座に言い放つ。

「何のための法印家だ。貴様以外にも、靈能者はいるだろ？　貴様の手駒で対処すればよい」

葛は無表情を保ちながら、心中で舌打ちした。

(……素人め)

妖怪退治はそんなに甘くない。
だが、この男に逆らう事はできない。

「……では、そのよつて

葛はそつと、携帯を取り出して連絡を取った。

…

「……来た」

神社の一角。

水華は空を見上げた。

黒い影が風を流れるよつてやつてへる。

「……ホウ」

妖怪は水華の姿を認めると、感嘆した声を上げて、地面に着地した。妖怪は犬の姿をしていた。しかし、その身体は四肢一本が水華の身長に達するほど巨大である。

水華は、ギリッと歯噛みする。

「炎を喰らう者……禍斗か……」

呴いた瞬間、ブワッと、犬の灼熱の妖気の奔流が空気を裂いた。咄嗟に障壁を築き、妖氣を遮断する。

「六花・封縛！」

水華は右手で刀印を結び、地面を通じて靈力で縛り付けようとした。だが、妖怪はいきり立ち、咆哮と共に妖氣を拡散させ呪縛術を霧散させた。

「……!?」

自分の術を容易く破られた事に驚愕する水華。

その隙を突くように、妖怪は牙を紅く輝かせて口を開けた。

「つー！」

「カアツ！」

妖怪の口内から紅い閃光がほとばしった。

反射的に左へ跳んでかわす水華。しかし、その隙を妖怪は見逃さない。

グワリと顎を開いて、水華を喰らおうとする。

「鳳仙花・風破！」

地面に転がりながらも、ポケットから呪符を取り出し、襲いかかってくる妖怪に風の刃を多方向に放つ。

術が妖怪の顔面に直撃し、ひるんだ隙に、水華は距離を取つて体勢を建て直せた。

だが、今の一撃は、大して効いてるよう見えない。

水華は攻撃のための術式は得意ではない。

得意である呪縛や結界が破られてる地点で、もはや打つ手はない。
(……相手は火の性を持つてますから、水の術式なら勝機はあるかもしがれませんが…)

それも、あまり望めない。

先ほど破られた『六花・封縛』は水の縛魔術だ。つまり水の術でも、生半可な術では破られる。

(……なら、強力な術を使つまで…)

そう考え、呪符を数枚取り出して構える。

それに応じて、妖怪も灼熱の火炎を纏つて突進してきた。

「六花豊穣・渦流壁！」

予定通り水の術で障壁を築く。

妖気が頭から障壁に激突し、壁を食い破るように押し付けてくるが、全力で築いた障壁は、そう易々と破られない。

「六花・封縛……縛、縛、縛つ！」

障壁に突つ込む妖怪に、強い念を込めた縛魔術を三重に放つ。

水気の網に縫い止められた妖怪は、妖氣を身体から撒き散らし、呪縛を振りほどこつともがく。

「世に満ちたる水の精靈……その水は全てを浄化し、清に還元する……」

結界術と縛魔術で動きを封じ始めたところで、さらに強力な術を放つための真言を紡ぐ。

「…水は黒、黒は夜、夜は空……今ひと度、月光の力を借りて除災の星定めにて圧伏せよ」

この術は、水華の使う水の術式では最強の術だ。

だが、全身全霊を込めて叩き落とさなければ成功しない。

だから、渾身の力で振り絞つて叫んだ。

「…水仙花・精進烈破！」

その瞬間、空を覆う雲が竜巻のように渦巻いて一点に集約し、一本の水の槍と化して妖怪を貫いた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア…！」

巨大な質量の槍に貫かれ、妖怪は絶叫した。
怒り狂つた怒号の咆哮。

だが、妖怪が術に呑み込まれたのも一瞬。
身体から灼熱の妖氣が爆散し、纏わりついた水氣を、その灼熱で乾かした。

(……まずいですね)

今の術で、水華は力を使いきった。
それどころも、強力な術を連発して、身体に無理が生じている。
わずかに残つた靈力を肉体強化に廻し、動かない身体にムチを打つ。

満身創痍の水華に、犬の妖怪は牙を剥いた。

「己H 小娘……」今にも飛びかかってきそうな勢いで、睨め付けてきた。

「…あら、人の言葉を話せますか

「黙れ！コノ禍斗ニ、ヨクモ傷ヲオ！」

荒い息遣いで吠える妖怪、禍斗。

今の術は確実に効いてる。

だが致命傷には及ばない。

水華の術の威力が足りなかつたのだ。

「我ニ刃向カツタ事ヲソノ命ヲモツテ購エ！」

「く……！」

牙を立てて飛びかかる禍斗に、

その時だ。

林の中から、人影が飛び出した。

「…せあつ！」

「ヌウ……！」

襲撃者が振り下ろす刀を、禍斗は炎の障壁を築いて受け止め、妖氣を爆散させて弾き返す。

襲撃者は空中で回転して、水華と禍斗の間に入るよつた位置に着地した。

呪言を刻まれた刀。

うなじの辺りで括った不揃いな黒髪が、風に遊ばれて宙で揺れている。

襲撃者の姿を認めた水華は、肩をすくめた。

「……良いタイミングで現れますね。貉」

「…たまたまだ。タイミングを囮つて登場するほどバカはやらねえよ」

背を向けたまま、首だけ動かして言つ。
そして、禍斗の方を見据える。

「……禍斗か。確か、中国の古来の、火を喰らい火災を撒き散らす
犬妖。随分大物が現れたな」

「…何者ダ?」

牙を剥いて、臨戦体勢で構える禍斗が低い声で答える。

「…」いつの兄貴みたいなモンだ

「従兄弟です。いい加減な表現はやめてください」

間髪入れずに言い放つ水華。

「……ソウカ。ナラバ貴様モ術師ダナ。喰口ウテヤル」

「俺はともかく、水華を喰うのはやめておけ。腹を壊すぞ」

「…心配ナイ。胃ハ丈夫ナ方ダ」

「なんの話をしているのですか!」

水華のツツコミニに近い絶叫を無視し、貉と禍斗が同時に動く。

「燃工弔…」

禍斗が口を開き、紅い閃光を吐く。
迫り来る熱線を、刀の一閃で切り裂く。

そこで禍斗が地を蹴つた。

貉は咄嗟に頭を低くする。頭上で風を切る音がして、禍斗が通りすぎた。

一瞬でも遅ければ、首が裂かれていただらう。

さらば空中で身体を捻つて背後から突進してきた。

「退つ！」

貉の真言が障壁を築く。

禍斗は不可視の壁に阻まれ弾かれる。一転して跳ね起き、犬の身体が素早く駆けた。

キン！と、貉の刀と禍斗の爪がつばぜり合いになる。

「抵抗スルナ、ニンゲン」

「断る！」

問答と同時に、貉は左手で剣印を結んで靈力を、禍斗は口から妖気を放つ。

二つの力が衝突し、爆発が生じた。

「うわあ……！」
「グオオ……！」

両者ともども爆風で吹っ飛ばされた。
木の幹に背をぶつける。

貉は口から血を吐きそうになつたが、飲み込んで我慢した。今は氣にしてる暇はない。

禍斗の方は地面に転がるも、跳ね起きて、貉に追撃を加えるべく突進した。

それを見た貉は、痛みで身体が動かない状況の中で、薄く笑つた。

「やれ、水華！」

貉の叫びに、禍斗は驚愕して足を止めた。

だが遅い。

犬の妖は既に術中だ。

四方からほとばしる甚大な靈力が、禍斗の四肢を絡めとるのがわかつた。

「コレハ……！？」

「八卦の封縛陣…」

今まで戦闘の外だった水華が呴く。放たれた術は、先ほどの水華の術の比ではない力で、禍斗の動きを完全に封じた。

「『ヒツ…』

ゴウと禍斗が妖氣を爆散させた。

しかし、かけられた術はビクともしない。

「無駄だ…お前じゃこの切り札は破れないよ」

「ナゼダ。コノ術ハアノ女ノ縛魔術ノハズ……コレ程ノ靈力ヲ残シ
テイルトハ思エン！」

「八卦の術は、靈具を媒介にして陣を介して靈力を増強して発動す
る……靈力を殆んど使わない」

「靈具ダト……？ソンナガドコニ……」

そこまで言つて禍斗はハツと目を剥いた。
貉の口がニヤリと笑う。

「気付いたか。この神社には大量の榦の木が植えられている。榦は
神木の代表だ。他にも桃や伽羅、槐など靈力の強い木も植えてある。
靈具の媒介には困らないんだよ」

「ヌウ……」

くぐもるような声で唸り、禍斗は伏せたまま大人しくなった。

それを見計らつたように、黒装束を来た人間が数人、禍斗を囲むよ
うにして現れた。

「疾影衆…親父の部下か。なんて都合の良いタイミングで現れやが
る」

「……どうやら、出でくるタイミングを見計らつて待機してたみたい
ですね」

「なら加勢しろつてんだ…」

舌打ちして、黒装束たちを睨む貉。しかし、彼らは素知らぬ顔で受け流した。

「（一）苦勞様です、貉様、水華様。あとは我々にお任せを」

「…チツ！良い性格してやがるな、石也！俺達が死にかけたのに、てめえらは高みの見物か！」

紳士的な態度で言う疾影衆の筆頭・石也に、貉は悪態を吐いた。他の疾影衆は、黒布マスクで鼻から下が隠れてるが、筆頭の石也だけは顔を露にしてるため、よくわかる。

「あの妖怪は我々では対処できませんよ…ならば足手まといにならないように、としたまでです」

「親父の命令で来たんだろう？…ー？なのに何も手を出さないのかよ！」

「！」

「ですから事後処理を。お一方は帰つて疲れを取つてください」

「チツ…」

いつまで立つても会話が不毛なので、貉は大人しく引き下がつた。

だが、帰宅直後に、貉達は驚愕する報告を受けた。

『法印葛が、射たれた』と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8626m/>

闇夜の対妖伝【陰】

2010年10月9日06時48分発行